



人間関係づくりの危機

滝 充

国立教育研究所生徒指導研究室長

生徒指導上の諸問題の背景にある子どもたちの対人ストレスを解消するために、人間関係づくりの支援が求められている。「日本のピア・サポート・プログラム」は、年少者をお世話する活動を通して年長者を育てる従来からの学校教育の手法と、体験的トレーニングとを組み合わせ、子ども同士の支えあい・育ちあいを図るものである。単にトレーニングするだけでなく、実際の活動で自尊感情を育む点がポイントである。

人間関係づくりの支援と方法

——支援の必要性——

昨今、続発している少年事件を見ていくと、必ずと言ってよいほど、いじめや不登校の影が見え隠れする。もちろん、それらは事件の直接的な原因とは限らない。事件とはさまざまな要因が絡みあつて起きるものだからである。しかし、事件を起こした子どもが好ましい人間関係の中におかれていたなら事件にまで至らなかつたのでは、と考えるのは私だけではあるまい。

子どもの心が暴走を始めても、事件に至る一歩手前で歯止めがかかれば、さほどの不幸は起きない。悩みをうちあける相手や、変調に気づいて声をかけてくれる者がいたなら、最後の一线で踏みとどまる可能性は高い。そもそも暴走に至る前の迷走を始めた段階で、友人が気持ちをクール・ダウンさせてくれることもありうる。

だが、今の子どもにそうした豊かな人間関係を期待することは困難になっている。対人関係をうまく築けない子どもが増え、他者に構わず自己主張するか、他者と問題を起こささないため自己を抑え込むかの両極になりやすい。対人関係のストレスは、日本のいじめや不登校、暴力行為から学級崩

壊のいずれの背景にも存在している。マスコミを賑わす事件を起こさないためだけでなく、日常的な危機管理の点からも子どもの人間関係づくりの支援は急務である。

日本のピア・サポート・プログラム

そうした子どもの人間関係づくりを支援する方法として、国立教育研究所では「ピア・サポート」の研究を進めてきた(滝充編『ピア・サポートで始める学校づくり』金子書房)。ピア(Peer)とは仲間を意味するが、「子どもは子どもの中でこそ育つ」という観点に立ち、子ども同士が互いに支えあい育ちあう場として学校を再生するプログラムの開発を行ってきた。海外の活動を参考にしながらも、日本の子どもの状況や学校制度をふまえ、日本の伝統的な教育活動を活かした独自のプログラムになったことから、あえて「日本のピア・サポート・プログラム」と呼んでいる。

このプログラムは、子どもの「社会性の基礎」を補うことを目的とした体験的トレーニング(領域1)と、そこでの経験や気づきを活かして子どもが主体となってお世話を活動(領域2)との二つで成り立っている。私はそれを自動車学校の「コース練習」と「路上教習」にたとえ、前者の体

験的トレーニングを不可欠なものとして位置づける一方で、トレーニングで対人関係能力を完成させる、トレーニングで直接に子どもを変え、等の考えを明確に否定した。

そもそも対人関係能力が、「実体験」なしに形成されるはずがない。人や車が行きかう実際の道路を走ることなく、疑似体験のみで他者に配慮した運転などできるようなはならないのと同じである。幸い、路上教習に匹敵する活動は、日本の学校にはふんだんにある。年少者のお世話をさせることで年長者を育てようという教育活動は、日本の学校の伝統と言ってよい。領域1の体験的トレーニングを最小限にとどめても、子どもが主体となりお世話をする領域2の活動でじっくりと育つことを期待できる。

トレーニングは基礎を補うだけ

もう少し補足しておこう。領域1で補う社会性の基礎とは、昔の子どもが近隣の遊び仲間を通して獲得してきた程度の中身と考えてもらえばよい。みんなと遊んだり、その中で我慢したり譲り合うといった「対人関係の体験」、みんなと遊ぶことは楽しいけれど嫌なこともあるといった「対人関係への気づき」。そんなものを考えてもらえばよい。そして、学校の教育活動というのは、

その程度の内容は獲得したうえで子どもが学校に来るとの前提で組み立てられてきたし、成果をあげてもきた。

ところが、今の子どもの場合、近隣の遊び仲間を失ったせいであろう、体験そのものやそれに伴う気づきといった社会性の基礎が貧しくなってきた。その結果、学校がいくら子どもも主体のお世話活動を企画しても、いっこうに社会性や道徳性が育まれていかず、単なる強制に終わりがちになっている。そのあげく、そうしたお世話活動を取りやめてしまったり、カウンセリングの手法等を用いて教師主導で子どもを矯正するかのような活動まで現れてきた。

しかし、日本のピア・サポート・プログラムは、そうした動きとは一線を画している。近隣関係が消失して社会性の基礎が貧しくなってきたのなら、その部分だけ補えばよい。トレーニングでそれ以上の段階までを矯正したがる考えには、賛成できない。領域1のトレーニング部分は「久しぶりに友だちと遊んだ」という体験の提供だけでも十分で、教職員が無理に「たかめる」「ひきだす」ことは余計なことと考えている。なぜなら、その先は子どもが主体となり世話をする、領域2のような「実体験」を通して身につければよいからである。

学校づくりのプログラム

ところで、日本のピア・サポート・プログラムは、人間関係づくりのプログラムであると同時に、学校づくりのプログラムでもある。このプログラムの実施には全教職員の協力が必要であるし、これを実施することで教職員の連携協力も実現できるからである。とりわけ領域2の活動は、学校全体の協力なしにはよいものにはならない。

例えば、小学校で六年生が一年生のお世話をする場面はいくらかもある。だが、それは一年の教職員が楽をするためのものではなく、六年生を育てるためのものである。だから、一年生の教職員の口から子どもを褒めたり励ましてもらうことは不可欠であるし、二、五年生の教職員もそんな場面に出入りしたら「六年生は偉いね」と声をかけてほしい。他学年の教職員からの評価は、六年生の教職員からの評価より、子どもには数倍うれしいものである。一年生のうれしそうな表情やお礼の言葉は、六年生の自尊心を育むうえで何にも代えがたい。

親にしろ担任にしろ、自分の子どもをよりよく育てなければ、自分が直接に褒められるだけでなく、他人の口を介して褒めてもらったり思いを伝えてもらうことの効果に気が

づくべきである。ところが、今の親と同様、教職員も「自分の指導で子どもを変えたい」気持ちが高く、学級への抱え込みや教科等への引きこもりが目立つ。学校全体で取り組む、六(三)年がかりで子どもを育てる等の発想がない。個人の指導力向上や授業に即役立つことには関心を示しても、学校の教育力の回復には熱心ではない。

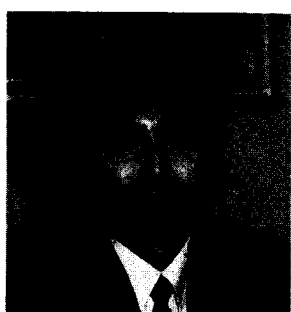
しかし、子どもに育ってほしいと本気で願うなら、他の教職員や保護者、さらには子ども自身の力をも活用するほうがよい。他人の手や口を通して間接的に指導する伝統的な知恵を使う方がよい。日本のピア・サポート・プログラムに取り組みと教職員が変わる、教職員が変わることで取り組みができる、というのはそういう意味である。

体験的トレーニング実施の注意点

ところで、日本に紹介されている体験的トレーニングは他にもある。だが、日本のピア・サポート・プログラムは他とは異なり「トレーニングだけで子どもを変えるのではない」点を強調し、次に続く活動を重視する。その理由は、「トレーニングで変えられる」かのような発想を

学校にもちこめば、日本のまじめな教職員は「より効果的に子どもを変えられるトレーニングづくり」に励みかねないからである。しかし、それはきちんとした食生活をおろそかにして栄養ドリンクで子育てをするに匹敵する愚行である。教育を治療と混同してはならない。子ども自身が実際に活動する中でこそ対人関係能力は育つ。トレーニングは下地づくりに過ぎない。

また、他と異なり「学級担任が学級でトレーニングする」ことを強く戒めている。熱心な教職員に学級という密室で子どもをトレーニングさせれば、容易に洗脳状態を生みだしてしまうからである。大人と異なり、密室での洗脳を拒否しきれない子どもは少ない。しかも、教職員は善意だけに話はややこしい。そうした危険を防ぐため、トレーニング部分では複数の教職員が立ち会う公開での実施を求めているのである。



著者プロフィール

たき・みつる 1954年生まれ。名古屋大学大学院教育学研究科博士課程修了。宮崎大学教育学部助教授を経て現職。生徒指導上の諸問題の調査研究に基づく「予防教育」法を提案。新潟県教委の「いじめ防止学習プログラム」、福岡県教委の「ピア・サポート活動推進事業」に具体化される。編著書に「学校を変える、子どもが変わる」「ピア・サポートではじめる学校づくり」など。